

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	1192300141		
法人名	社会福祉法人 章佑会		
事業所名	和光市共生型福祉施設ひかりのさと		
所在地	埼玉県和光市丸山台2-20-15		
自己評価作成日	令和 3年 11月 24日	評価結果市町村受理日	令和 4年 3月 15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/11/index.php">http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/11/index.php</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	有限会社プログレ総合研究所		
所在地	埼玉県さいたま市大宮区大門町3-88 逸見ビル1階		
訪問調査日	令和 3年 12月 17日		

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

ひかりのさとは認知症高齢者と身体障害者が同じ建物で共に暮らす地域密着型の共生型福祉施設です。一昨年から流行ったコロナウイルスの影響で交流の機会が減りましたが、大きなイベントの際は合同開催し高齢者と障害者が共に楽しい時間を過ごす時間を作っています。コロナウイルスが収束していき交流の場が多く持てる時間が増えてきたら、年間の行事以外の「日々の生活」の中で交流の場や招待できる時間・場所を設け、認知症高齢者と身体障害者が共に声を掛け合い暮らしていける施設を目指しています。また地域密着型施設として地域に根付いていけるよう地域交流の場にも積極的に参加し、地域行事(夏祭り、餅つき)、地域サロン、地域清掃、地域防災訓練への参加にはひかりのさとの入居者様も一緒に参加し地域の方々との交流できる場を作っています。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

事業所理念に「住み慣れた地域で安心した生活を支援する」とあるように、地域密着を基本とした体系が出来ている。建物は3階建てで、1階には地域包括支援センターがあり、2階がグループホームひかりのさと、そして3階が身体障害者ケアホームとなっている。認知症高齢者と障害者が共に過ごすことや、職員間の交流も日常的であり、1階の地域包括支援センターとはケア会議等での相談が容易で利用者にも職員にも安心の体系がある。避難訓練等は、1~3階の合同訓練としており、意識としても一体感がある。また、地域防災訓練では、利用者も参加しての交流がある。ワンフロア、ワンユニットの少数利用者で係わりも密であることより、利用者の変化に気付き易く、一人ひとりを良く理解できているのが特徴でもある。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念と共生型という施設のコセプトに基づいて職員が高齢者の介護も障害者の介護も垣根なく行える体制づくりをし実践できていたがコロナ禍が続いており外部との繋がりは薄くなっていた。	「住み慣れた地域で安心した生活を支援する」を、事業所理念としている。年度事業計画を職員へ話す際に理念を共有し実践に向けており、地域活動等への積極性が浸透している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域清掃への参加。学童の子供達との交流も増えている。施設全体としては、民生委員や地区社会福祉協議会などとの交流が増えてきている	自治会に加入しており、回覧板を通しての情報や、自治会長との交流を通しての情報アドバイス等も得ている。地域の掃除には利用者も参加して、コロナ前では地域行事への参加も多くあった。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	一般高齢者向けうるかむ事業の実施		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	地域の代表の方から地域行事の参加の仕方などアドバイスをもらっている。	コロナ禍のため実施できずにいたが、先月に久しぶりの開催となった。市役所高齢課と障害課、及び町会長、地域包括支援センター、民生委員他の参加で非開催期間の状況説明を中心として進めた。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	毎月、報告を行っている。その都度、相談を行い、ご指導ご助言をいただいている。	月次報告の他、事故等の行政報告では窓口での意見交換もある。コロナ禍では密となる催事の自粛要請やマスク、消毒液の配布を受けた。市役所と地域包括支援センターとの連携が新入居に繋がっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	委員会の活動もしておらず、今年度は施設内研修でも身体拘束の研修実施も行えていなかった。電子錠や自動ドアのスイッチ類は自由な出入りを妨げている。	フロアミーティングで個々への対応を具体的に指摘し合うようにしており、拘束や虐待等の禁止を確認している。建物の構造的に施錠が必要であるため、利用者の希望に添い職員同伴で一階玄関から外へ出るようにしている。	身体拘束廃止委員会を開催することで、虐待防止も含め職員間の更なる理解を高めることを期待したい。勉強会では拘束となる事例を他所から学び、職員間で共有されることが望ましい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	施設内で虐待の研修を実施できていないが職員間で意見交換を行いさまざまなケアの方法を実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	個々のケースに応じて関係者と協議し、取り組んでいる。併設する地域包括支援センター職員からも助言を受け実践に生かしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	説明や相談を重ね、契約を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナ禍の影響でいまだ家族会の実施などは行っていない状況	本人様子やケアの方針、検討事項は、毎月手紙で家族に送っている。電話やメール等で意見が届くこともある。持病があり過度の飲食を求める人へは、職員間で統一した対応が出来るようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に二回、全体会議やフロアミーティングの場を作り職員の意見や提案を受けて反映できるよう努めている。	月2回のフロアミーティングは、全員参加を基本とし、ケアカンファレンスが主ではあるが、その他の様々な意見が出ている。コロナ禍にあり身体を動かすことへの提案や、食を楽しむアイデア等を実践とした。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	リーダーからの報告や必要に応じ、個人面談を実施している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	OJTの内容を申し送り指導に当たっている。外部研修や資格取得に対し支援も行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	併設する包括支援センターを通じネットワークづくりを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前のインテーク、アセスメントの実施を通じて関係構築を行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居希望の面接時から関係構築し、課題把握に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	受け入れ前のケアマネや関係機関、担当包括と連絡を取り合い相談し対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自身でできる事、また分担しながら役割をもって生活を送っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	月に一度手紙を送ったりイベント時に撮影した写真も一緒に送付している。またコロナが落ち着いて以降は面談も再開し本人の施設での様子を共有している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	周囲の協力の得られる部分で対応をお願いしているが、今年度はコロナの影響で出入りが極端に減っており行えていない。	家族や兄妹からの手紙が来たり、電話の取次ぎ等もある。趣味や特技の継続として、将棋や編み物、塗り絵等への声掛け支援をし、相撲場所前の番付表を望まれる人へは、スポーツ新聞を提供している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	今年度は新しい入居者が立て続けに入ってきたのでレクリエーションや行事を通じて関係性の把握や関わり合いの強化を行った。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	今後の手続きを行うとともに、併設する包括支援センターを通じて、経過を把握している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	常に本人のしたいことを聞いたり観察を行い計画作成担当を中心に職員と一緒に以降の把握の反映に努めている。	実態調査でのアセスメントを職員間周知するほか、生活開始後も密に声掛けし係わることで知ることもあり、申し送りノートへ残している。発語が難しい人へも話しかけることで表情から分かることもある。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に関係機関との調整やご家族などへの聞き取りにて把握している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	現場の職員と看護師、計画作成担当が一日を通して本人ができてきていることの維持に努める。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	併設する包括支援センターの助言を受けながら計画作成を行っている。	3カ月毎の見直しで、安定している方は6カ月としている。居室担当者は置かず、毎月のモニタリングを経て計画作成者がまとめている。地域包括支援センターでのケア会議にプランを提出し、意見を聞いている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録の共有を行っている。看護師の意見を取り入れつつ介護の見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の状況に応じて対応を心掛けている。併設する身体障がい者グループホームの機械浴を利用するなど、柔軟な支援に取り組んでいる		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	施設入所前から地域とのつながりが薄くなってしまっている人が多いがそこからまた個々の繋がりを作る環境ができていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	施設に入居と同時に訪問診療へ切り替えることを家族に説明し定期的な診察を行う事で適切な医学管理と健康管理体制を構築している。	内科と精神科の訪問医が月2回来訪している。看護職員の在籍があることから、夜間の連絡も可能であり、夜間の医師との連携も出来ている。緊急搬送時は、管理者および家族へも連絡をしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	ナースノートを作って以降、看護師の出勤日以外に介護職の「気づき」を明確に記すことができ、そこから訪問看護師に伝えることができています。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	医師やワーカーとの関りを密にし、るじゅうや協力が得られるよう配慮している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	訪問診療の医師と相談、連携を図りながら早い段階で家族に状況の説明を行っているが地域の関係者と共にチームでの支援は行っていない。	重度化指針を入居時に説明し、出来ることと出来ないことを理解してもらっている。身体的な異常変化等があれば、訪問医から家族への説明があり、入院等の方針を家族と相談している。看取りは、基本行っていない。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	AEDの施設内研修の実施や急変時の連絡体制の確認、連絡先の把握		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防計画に基づいた定期的な消防訓練と地域の防災訓練に参加している。	1階の地域包括支援センターと、3階の身体障害者ケアホームと合同での避難訓練を年2回実施している。近隣者への連絡も行い地域の防災訓練にも参加している。備品類は1階の交流スペースに配置してある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人一人の人格を尊重し、プライバシーを大切にしながら対応している。	個人記録類は鍵付きの棚で管理され、パソコンもパスワード管理としている。ケア方針を話す際に、尊厳について学び合うようにしている。申し送りでは、個人名を言うことなく部屋番号等で周知するようにしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	施設に定期的にくている移動販売車を利用しながら本人が食べたい物を選んでもらっている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	施設での日常の中でも本人が今まで生活してきたリズムを大切にしながらその人のペースに合わせて生活している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	週に2回ある入浴時、自分で着る衣類を選択できるよう促したり毎朝の洗面時はくしを渡し自ら整容ができるよう支援している		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	毎日決められたメニューなので好みに寄り添うことは難しいが後片付けを一緒に行うなど本人の継続できる能力の維持に努めている。	3食の調理は職員が担当し、利用者は食器洗いや拭き取りを一緒に行っている。メニュー希望が出れば仕入れを変更し、餃子やお好み焼き等々喜ばれている。毎月の行事食も利用者の楽しみの日である。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個々の摂取状況を把握しながら本人が好むものを健康状態と照らし合わせながら提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアは毎食後行えているが自分で歯磨きをしているがきちんと磨けていない入居者様のケアは不十分なところがある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	定時のトイレ誘導以外本人がいつも失禁している時間を見極めてその時間に誘導しなるべくトイレ内での排尿を促している。	排泄チェック表でパターンを掴んでいるが、声掛けも無理強いはしない。退院後の対応は、オムツからリハビリパンツへ戻し、トイレ誘導を重ねることで意識と感覚も変わり、トイレ排泄が可能となっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘気味の入居者様で歩行が安定している人にはフロア内の掃除などを促し施設内での運動を心がけている。また水分の強化、医師へ相談して薬の調整なども行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	基本、入浴予定の通りに行っている。個別の事情があれば随時変更している。	週2回午後帯で実施しており、一人ずつ湯船の湯を変えている。入浴嫌いな方へは、順番や担当者を変えたり工夫がある。3階に機械浴があり連携を取りながら使用している。ユズ湯や菖蒲湯は喜ばれる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人が休みたい時間に居室で過ごせるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方内容を薬と一緒に看護師と確認したり会議などで薬の副作用などを学び本人の状態の変化の確認に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人が昔好きだったものや行っていたことなるべく施設でも継続して行えるように本人に聞きながら取り組んでいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	家族や後見人の協力を得ながら近くの店まで買い物に出かけたり公園へ散歩に出かけているが今年も去年同様コロナの影響もあり外出の機会は減少している。	1階の地域包括支援センターに人の出入りが多いこともあり、コロナ禍では外出を止めていた。最近になり、近場の散歩や買い物に出かけたり、家族とともに外食へ出かけたりができるようになり、1階の地域交流室での面会も可能になってきている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	施設内で本人が自身のお金を管理したり所持したりしていることはないが買い物に行った際にお会計を任せたりしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族から電話が来た際は本人と話せるよう家族に提案したり時間を設けている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	廊下には行事の写真を掲示して記憶を刺激したり水道には季節の花を飾り季節感を出すようにしている。	コロナ感染予防以前から換気と次亜塩素酸による手摺や床の掃除を徹底している。季節の花や季節のイベント写真を掲示しており、利用者も立ち止まって見ている。足元不安な人が多いので、廊下には物を置かないようにしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間では本人の過ごしやすい時間(本や新聞を読んだり好きな音楽を聴く)を過ごしたり仲の良い入居者様を近くの席にしたりしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人が必要なものはなるべく普段から使っていたなじみの物を持って来てもらうことで混乱が軽減されたり居心地の良い空間になるよう配慮している。	備え付け備品はエアコンとカーテンであり、他は使い慣れた物を持参して、昔の写真やデイサービスで貰った色紙を飾る人もいる。毎朝モップ掛け掃除をする人は、自分の役割と捉えている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	それぞれの生活様式に合わせたなじみにある物を居室に置いている(時計・鏡・電気シェーバー・テレビなど)		